

文化人類学研究  
の創設

文化人類学部門も昭和二十六年に設置され、同年、教授として石田英一郎、助教として泉靖一が着任し、翌年には助手として中根千枝、大林太良が加わった。この時期は文化人類学という研究分野が漸く大学における研究・教育の科目として認められるようになった頃で、二十八年には大学院生物系研究科の人類学専門課程に文化人類学課程が、翌二十九年には教養学科に文化人類学の課程が設けられたが、これらの創設には主として石田と泉が当り、二人は引き続いて両課程の教育を担当した。

初期の文化人類  
学の研究

文化人類学関係の本研究所における初期の共通研究課題は、石田・江上両教授が中心となって実施した「ユーラシアの民族と文化」であり、アジア諸地域の生活と文化の特質及び文化交流の問題を研究した。昭和三十一年に江上教授を団長としてイラク・イラン遺跡調査、三十三年に石田教授を団長としてアンデス地帯の遺跡調査が実施されるに及んで研究は一層発展し、「新旧両大陸における文明起源の比較研究」が試みられるようになった。

実態調査による  
文化人類学研究  
の進展

実態調査をふまえてのアジア諸社会の比較研究を本格的に組織化したのは、中根千枝であり、同教授を中心に、青木保、伊藤亜人、清水展、川崎有三が助手として次々と加わり、文化人類学の研究班の中核を形成した。研究班では、各自の調査研究を提示して文化人類学の方法論を再検討し、この学問の飛躍的な発展をかけた。昭和四十七年以降、「韓国農村の人類学的調査」を韓国の学者と協力して行い、その成果を四十八年に『東洋文化』第五三号に発表した。五十二年から数年にわたって「アジア諸社会における儀礼の意味と機能」の共通課題のもとに共同研究が進められ、その成果は五十八年に *Ritual and Society (East Asian Cultural Studies Vol. 22, No. 1~4)* として刊行された。その後、共通課題としては「アジア諸社会における伝統的社会組織とその変容過程」が取り上げられ、その前期においては少数民族を中心に比較研究を行い、後期においては、アジア諸社会のそれぞれのドミナントな人口を中心とした社会の比較を行った。



石田英一郎

石田英一郎（昭和二十六年～三十七年在職）は、文明の起源に関するモルガンらの内的発展説とシュムットらの文化圈説の二つの相反する立場を検討し、農耕、牧畜の発明と気象の変化・乾燥化の關係、灌溉農業と階級成立の關係などを研究し、一方、文化人類学の研究・教育の方法論の確立に努め、その成果の一部は『文化人類学ノート』として発表された。

泉靖一

泉靖一（昭和二十六年～三十年、三十七年—四十五年在職）は、石田教授と共にアンデス調査団の中心的役割を担ったが、それより早く、ブラジルの日系人の調査に従事し、二十九年に『アマゾン—その風土と日本人』（共著）を刊行した。その後、さらに韓国の調査を始め、戦前の同氏の調査を合わせて、四十一年に『済州島』を刊行した。アンデス調査では、コトシュ遺跡の発掘成果を中心として中央アンデスにおける形成期の文化を考察し、三十七年に「アンデスの東斜面における形成期文化の研究」を発表するほか、アンデス、中南米を中心のフィールドとして活発に文化人類学的研究を進めた。

中根千枝

中根千枝（昭和二十七年以降在職）は、長期にわたるインドにおける実態調査を基礎として研究を展開してきたが、比較研究の立場から東南アジア、東アジアの諸社会に関心を広げ、中国とくにチベット系民族と漢人社会の關係を現地調査をとおして研究した。インドにおける研究成果としては、母系制のアッサム少数民族の比較研究である *Caro and Khasi* (Paris 1970) や シッキムの調査にもとづいた『Sikkim における複合社会の研究』（『民族学研究』三十二年）、ヒンドゥー社会の研究にもとづく『家族の構造』（四十四年）が主なものである。また社会人類学の理論的研究を進め、アジア諸社会の比較研究の方法論を提示した。

関本照夫

関本照夫（昭和六十年以降在職）は、インドネシアの実態調査をふまえ、農村から国家に至る諸段階での儀礼の研究を行い、「ジャワにおける儀礼的集合の構造と政治的統合の過程」などの論文を発表した。また東アジア諸社会の社会人類学的比較研究を進めている。

文化人類学分野  
の助手

文化人類学分野の助手として在職した研究者の在職中の研究は、次の如くである。大林太良（昭和二十七年～三十四年在職）は民族学的な立場から東南アジア大陸諸民族の親族組織を分析した。青木保（四十二年～四十八年在職）は、タイにおいて僧院を中心とした実態調査を行い、象徴人類学的アプローチを特色とする研究を行った。伊藤亜人（四十八年～五十四年在職）は韓国珍島において実態調査を行い、従来の両班中心の社会組織の研究のスコープに入ってこなかった民



衆レベルでの社会組織の研究を行った。清水展（五十五年～六十年在職）はフィリピンの実態調査に従事し、とくに、ルソン島西部、ピナトゥッポ山麓のアエタ族（ネグリート族）を集中的に調査した。川崎有三（五十八年以降在職）は、マレーシアの潮州人漁村の実態調査に従事し、それにもとづきシステム論的アプローチによる諸論文を発表した。

## 国際シンポジウムの開催

以上のように、汎アジア関係諸部門は、創設から昭和二十年代にわたって個々の分野で大きな成果をあげたが、昭和三十年代に入ると、アジア諸国における現地調査が活発に行われ、諸国の研究者との交流も格段に増加したため、研究の方法と内容が再検討され、研究全体が大きく発展した。このような研究状況のなかで、昭和五十八年（一九八三）四月に、中根教授を中心として汎アジア部門が全体として組織した「アジア研究における社会科学の概念と方法に関する国際シンポジウム」には、インド、バングラデシュ、パキスタン、タイ、マレーシア、フィリピン、シンガポール、中国、韓国から、文化人類学、経済学、政治学等の諸領域での代表的な学者が参加し、四日間にわたって十分な討論が行われ、その成果は *Social Science and Asia* として五十九年に刊行された。この事業は社会科学の個別専門分野の理論・方法と深くかかわる本部門の特徴をよく示している。

## 比較思想の新設と従来の研究

比較思想は昭和五十六年（一九八一）の大部門制移行にともない新たに設置された研究分野であるが、この分野では、昭和二十六年から小口偉一、築島謙三、結城令聞、窪徳忠らによって「東洋宗教の諸形態とその基礎」を課題として研究が行われてきた。アジア諸民族においては仏教などの「成立宗教」と他の「民族宗教」とが併存し、「民族宗教」が諸種の形態をもっていることから、諸民族の宗教の位層的構造を比較研究した。それと同時に、「近代日本のイデオロギーの構造」、ついで「近代日本の社会と思想」の研究班が組織され、小口偉一、飯塚浩二、築島謙三、高木宏夫、宮川透、生松敬三は、近代日本の知識人の思想形態、宗教団体の組織と活動などについて研究し、日本の文化を広い視点から考察した。

小口偉一

小口偉一（昭和二十二年～四十五年在職）は、東洋の民族宗教の底流としてのシャマニズムを物質文化や社会的諸関係の発展段階との関連において研究し、とくに東洋宗教のカリスマ的、伝統的形態を分析して、「東洋社会の呪術的構造」などの論文を発表した。その関連において、日本とアジア諸国との宗教の比較研究を行い、二十八年に『日本宗教の社会的性格』を発表し、ついで日本の庶民的宗教教団について研究した。また、三十年には『宗教社会学』を刊行し、マックス・ウェーバーの理論を検討して宗教社会学の方法論の確立にも努めた。

築島謙三

築島謙三（昭和十八年～四十六年在職）は、東南アジアを中心としたアジア諸民族の思想・文化について心理学の立場から研究し、十九年の「未開人と舞踊」など多くの論文を発表した。その後研究の対象を広げ、外国人の日本人観、日本などの農民・漁民のパーソナリティーについて考察し、ついでマレーシアの現地調査を行い、マレイ人の民族意識を研究した。それと同時に、文化研究の基礎理論に関して考察を深め、研究成果をまとめて三十七年に『文化心理学基礎理論』を刊行した。

比較思想分野の  
助手

比較思想の研究分野で助手として在職したのは、高木宏夫（昭和二十四年～三十三年在職）、宮川透（二十六年～三十二年）生松敬三（二十八年～三十二年在職）である。高木は、日本における宗教集団の問題について調査研究した。宮川は、近代日本における代表的な思想の構造を探究する研究を行い、生松は、思想史の立場から近代日本における代表的知識人の精神形成に関して森鷗外に焦点を置いて研究した。

比較思想研究対  
象の拡大

日本を含むアジア諸地域の宗教・思想に関するこれらの比較研究は、各地域の社会構造の分析との関連において進められたが、とくに四十年代に入って研究所教官によりアジア諸地域の現地調査が多く実施されるようになる。研究対象が拡大されて、東南アジアの華人社会の宗教儀礼、インド亜大陸のヒンドゥー教とイスラム教との関係、西アジア地域のイスラム教などについて研究され、比較思想の問題は新たな視点から検討されるようになった。



## 第二節 東アジア第一部門

東アジア部門の  
構成

中国を中心とする東アジア地域は、古来我が国と最も深い関係のある地域であり、戦前すでに中国・朝鮮研究のすぐれた成果が蓄積されていた。この伝統を受けて、本研究所では、創立以来東アジアは中心的な研究領域として設定されてきたため、この地域を研究対象とする部門は他の地域と比べて多く設置された。この事情から、大部門制への移行後、東アジア部門については、所内的には経済・社会、政治過程、歴史、考古を研究する東アジア第一部門と、宗教、思想、文学、美術を研究する東アジア第二部門とに分けている。ここでもこの区分別を用いて記述することにする。

創立当初の中国  
研究

本研究所創立当初、中国の歴史的問題と現代の問題が多く研究題目としてとりあげられ、新たな視点から実証的かつ総合的研究を行うことになった。昭和十七年（一九四三）一月、中国法制史の仁井田陞教授と中国外交史の植田捷雄嘱託が就任し、二人を中心とする中国に焦点を置いた研究課題としては、東洋法制と法律思想の歴史の変遷、東洋法制の現状、東洋政治・行政およびその組織機構、東洋を中心とする近世外交史、東洋における渉外的法律関係の五つがあげられた。（植田捷雄の研究は汎アジア部門の節で述べる。）

中国史研究

仁井田陞教授は昭和十七年四月から十九年十二月まで三回にわたって北京をはじめとする華北地方に出張して、ギルドと家族の実態を調査し、関係資料を蒐集して、中国社会の法社会学的研究に従事した。このギルド調査には今堀誠二嘱託も参加した。中国史研究は本研究所の重要な課題であって、藤井宏嘱託が明清時代の社会経済史、鈴木中正助手が清代の宗教結社について研究を進めた。

戦後初期の研究

終戦後、アジア研究のさびしい反省のなかで、仁井田教授を中心として中国研究のあり方をめぐって論議



中国史研究班の  
組織

がなされ、とりわけ中国社会史研究などにおいて新しい視座に立つ論文が『東洋文化研究』を中心に発表された。昭和二十三年に本研究所の本拠が大塚の旧東方文化学院の建物に移り、その翌年に歴史部門が増設されると、周藤吉之、西嶋定生両助教授が就任し、その後、松本善海、関野雄両助教授が着任して、中国史の全般にわたって研究を行う基盤が築かれ著しく充実した。また助手として、三十六年までに、山口修、古島和雄、堀敏一、小倉芳彦、佐伯有一、重田徳、柳田節子、西川正二、松丸道雄が就任した。こうして研究所において中国史研究はその支柱となり、きわめて活発に行われた。

この中国史研究では、昭和二十六年以降、中国における国家構造と土地制度の歴史的展開を課題として研究班が組織され、十数年にわたって継続された。この研究班の目的は、中国社会では四千年にわたって実質的变化がなく停滞的であったという従来の通説を批判して、その歴史のなかの進歩と発展を理論的にも実証的にも究明することであり、そのため、中国社会の基本的な構造である土地所有形態とそれを基盤として樹立された国家構造に焦点を置いて、各時代における特質とその発展を明らかにしようとしたのである。

この研究では、中国史の時代区分について唐から宋への変革を重視し、唐末・五代をもって古代と中世を区分して、古代社会と中世社会の歴史的な性格を究明して、中国社会の発展をあとづけた。そのなかで、とくに、古代においては、秦漢帝国と隋唐帝国の国家構造、均田制に至る土地制度の展開、中世においては、宋代の荘園制・佃戸制、明清時代の地主制、資本主義の萌芽の問題に関する手工業について研究の焦点が置かれた。さらに詳しく述べれば、殷周、春秋戦国の国家構造に関する松丸道雄・関野雄の研究、秦漢帝国の国家構造、豪族の大土地所有に関する西嶋定生の研究、魏の屯田制から均田制の崩壊までの土地制度に関する仁井田陞・山本達郎・松本善海・西嶋定生の研究、唐宋の国家制度に関する堀敏一・西川正二の研究、宋代の大土地所有形成、荘園経営、佃戸とその農奴化に関する周藤吉之・仁井田陞・柳田節子の研究、明清時

中国史研究の  
内容



代の地主制、税役法、農民の反乱、都市・農村の手工業経営、商品流通に関する西嶋定生・古島和雄・佐伯有一・重田徳の研究などが行われ、『紀要』その他に多数の論文が発表された。とくに昭和三十一年、『紀要』第一〇冊に土地制度史研究を特集して、西嶋、松本、山本、周藤、仁井田、佐伯、重田、古島の論文が掲載された。このように本研究班の研究は、戦後に再建されたわが国の中国史研究において指導的役割を果たし、学界に寄与するところが大きかった。

これらの研究は相互批判と資料の丹念な渉猟と詳細な分析に依拠したものであることは言うまでもないが、その資料は公刊された文献ばかりでなく、新たに発見された文書や未公刊の文書をも対象としたところにひとつの大きな特色があった。とくに敦煌文書については仁井田と山本によって、また竜谷大学所蔵の大谷探検隊将来の吐魯番文書については仁井田、周藤、西嶋、松本によって紹介と研究が行われた。

## 現代中国研究班

この中国の歴史研究と密接な関係をもって、現代中国の研究班が昭和二十九年から発足した。これは、中国革命に至る過程を具体的に究明し、とくにその社会変革について考察するものであって、それと同時にソヴェト社会主義制度との比較により、中国における社会主義建設の創造性を検討しようとした。当初は土地改革の問題を中心に据えて研究し、仁井田陸、松本善海、福島正夫、衛藤藩吉、古島和雄、花村芳樹、小堀巖が参加し、その成果は『東洋文化』などに発表された。アヘン戦争以後の中国近代史は植田捷雄を中心として政治外交史の面から研究されていたが、この研究班でも中国の変革の歴史的前提としていわば内側からの研究が進められた。さらに三十一年からは政治、法律、経済ばかりでなく、広く文学、美術の問題にも研究を広げ、新たに佐伯有一、本橋渥、竹内実、米沢嘉圃、尾上兼英、新島淳良が加わった。福島正夫が研究班の責任者として、三十五年に人民公社に焦点を置いて研究報告をまとめ、『東洋文化』第二七号の特集号と『紀要』第二二冊に諸論文を発表した。

## 未公刊文書の探求



仁井田陞

仁井田陞（昭和十七年～三十九年在職）は、就任後、中国のギルドと家族の実態調査に従事し、この間に法制史学と法社会学の研究方法を検討して中国社会の理解に努め、戦後にその研究報告を『中国の社会とギルド』、『中国の農村家族』として刊行した。その一方、従来の研究をまとめて中国法制史を体系化することを試み、昭和二十七年に『中国法制史』を刊行した。ついで三十四年から三十九年まで、『中国法制史研究』四巻を刊行し、刑法、土地法、取引法、奴隸農奴法、家族村落法、法と慣習、法と道徳に分けて、九二編の論文を集大成した。この研究では殷周時代から現代に及ぶ中国の各時代の法制史上の多くの問題が論ぜられ、中国法の性格と発展が詳細に究明された。ここでは法学的考察ばかりでなく、敦煌文書などの資料の分析が行われ、また中国革命後の法、とくに土地法と家族法についても中国法制史のなから検討された。

関野雄

関野雄（昭和二十六年～四十二年任職）は、中国考古学の研究を進め、戦前華北で調査した半瓦当を中心とする戦国文化に関する考古学的研究をまとめて、昭和二十七年に『半瓦当の研究』を刊行した。さらに戦国時代の布銭などの形態、鑄造地と土地、国家との関係を調査して、中国古代貨幣の歴史的性格を明らかにした。三十一年には『中国考古学研究』を刊行し、中国の土器の系統、金属文化の性格、都城と建築の調査、度量衡制度の特色などの二六篇の論文を収録して、先秦時代の歴史の解明に寄与した。

西嶋定生

西嶋定生（昭和二十四年～四十年任職）は、明代の綿業に関して一連の論文を発表し、そこにおいて、十六・十七世紀に商品生産を目的とする農村家内工業として発展した綿業の歴史的性格を明らかにした。その後、唐代以前の国家構造と土地制度の研究を行い、とくに秦漢帝国の皇帝支配の成立とその基盤について分析し、その特徴は皇帝の一般農民に対する個別人身的支配にあり、二十等爵制によって実現されたことを立証した。このほか、漢代豪族の大土地所有、魏の屯田制、唐の均田制施行状態などについても研究した。

松本善海

松本善海（昭和二十四年～四十六年任職）は、戦後、旧中国の社会・国家の特質論を再検討するとともに、漢より唐に至る村落制度を研究して、秦漢時代の村落組織の編成、北魏の均田・三長兩制の制定、北朝における三正・三長兩制、唐代の隣保制などについて関係史料を考証して、これらの制度の内容を明らかにした。さらに中国の宋代から現代に至る地方自治制度の展開の解明に努めた。

周藤吉之

周藤吉之（昭和二十四年～三十二年任職）は、宋代史を集中的に研究し、二十五年発表の『宋代官僚制と大土地所有』



において、宋代の地方豪族出身の官僚の大土地経営の発達と、宋朝のこれに対する制限政策の過程を明らかにした。ついで二十九年には『中国土地制度史研究』（三十一年度学士院賞受賞）を刊行し、唐末五代より宋元時代に至る荘園制と佃戸制の発展を考察して、荘園の管理耕作者たる佃戸は農奴に比すべきものであるとしてその性格を究明した。それとともに、農民と官僚との間の両税の負担を均等化しようとした均税法についても検討した。

福島正夫（昭和二十七年～四十二年在職）は、現代中国法を研究し、とくに司法制度について、実情も含めてその特質と機能を検討し、また農業協同化による土地制度の変化を考察した。ついで人民公社について法的側面から研究し、ソ連の農業集団化と対比しながら、とくにその所有制を究明して、昭和三十五年に『人民公社の研究』を著した。このほか、明治時代の法制史につき多数の論文を発表し、三十七年に『地租改正の研究』（三十八年度学士院賞受賞）を刊行した。

昭和三十六年（一九六一）までに就任した助手の研究については、以下のとおりである。鈴木中正（昭和十七年～二十三年在職）は、清代宗教社会史を専攻し、とくに羅教などの秘密結社について研究した。山口修（二十二～二十六年在職）は元朝史を専攻し、『元朝秘史』の文献学的批判を行った。古島和雄（二十四年～二十八年在職）は明清時代における長江地域の地主経営と、『補農書』などの農書を研究した。堀敏一（二十四年～三十三年在職）は唐宋時代史を専攻し、唐宋の反乱や五代・宋朝政権の軍事的基礎について研究した。小倉芳彦（二十四年～二十八年在職）は先秦思想史を専攻して、論語の成立に関して研究した。佐伯有一（二十六年～三十二年任職）は、明清時代史を専攻し、絹織物業の展開、農民反乱について研究し、重田徳（二十八年～三十六年在職）は明清時代の経済史を専攻し、湖南米の市場構造や地主・佃戸制などを研究した。柳田節子（三十三年～三十五年在職）は宋代史を専攻し、荘園制下における地主・佃戸関係の地域性について研究した。西川正二（三十三年～三十九年在職）は、五代宋王朝の国家制度と土地制度を考察し、ついで辛亥革命期の社会経済史を研究した。松丸道雄（三十五年～四十一年任職）は先秦時代史を専攻し、甲骨文字資料から殷王朝の国家構造を研究した。

このほか、東アジアの考古学研究が江上波夫を中心として行われた。当初、それは「ユーラシアの民族と文化」の研究班において進められ、中国・朝鮮・モンゴルでの戦前の発掘による出土品を整理して、これらの地域の古代文化について研究したが、ついで、北方ユーラシア文化の日本への波及を考古学上実証するた



め、青森県・北海道の新石器時代狩猟民族の遺跡を発掘した。さらに昭和二十九年から、江上波夫、関野雄、佐藤達夫らは東北地方の館址の発掘調査を実施し、三十三年に『館址 東北地方における集落址の研究』と題する報告書を刊行した。その後、昭和三十八年から四十一年まで「東アジアにおける日本文化の形成過程」の課題のもとに研究班を組織し、江上波夫、泉靖一、西嶋定生、井上光貞、甘粕健が参加し、考古学と歴史学の両面から東アジアにおける国家と民族の形成について研究が行われ、東アジアを一つの世界として研究する視座が提示された。

#### 江上波夫

江上波夫（昭和二十二年～四十二年在職）は、ユーラシア大陸の農民と遊牧民の関係について考古学上及び歴史学上より考究し、その概観を『アジア・民族と文化の形成』『歴史のあけぼの』などに発表した。また匈奴の文化に関する研究は昭和二十三年に『ユーラシア古代北方文化』として、北方ユーラシアにおける民族の移動と文化の交流に関する研究は二十六年に『ユーラシア北方文化の研究』として刊行された。ついで日本文化の形成過程について東アジア史との関連において説明した。西アジアの考古学研究については西アジア部門の節で記述される。四十～四十二年刊行の『アジア文化史研究 要説篇』、『同 論考篇』は、主要な論文を収録したものである。

#### 東アジア考古学 関係の助手

佐藤達夫（昭和二十九年～三十五年在職）は、東アジア地域の先史文化を研究し、とくに蒙古高原など東北アジアの石器文化を考察した。甘粕健（三十六年～四十三年在職）は、日本の古墳文化を研究して、中国王朝と大和政権の政治的関係を考察した。

#### 中国史研究

その後、中国史研究では中国における国家構造機構と土地制度の史的 연구를課題として研究を継続し、昭和三十七年以降も、唐以前と宋以後に研究班が分かれたり、また研究の焦点を移動したりすることがあったが、一貫して同じ課題を究明してきた。その間に仁井田陞が三十九年に退官し、四十二年には関野雄が文学部に転任したが、佐伯有一が三十八年に、松丸道雄が四十五年に、池田温が四十六年に研究所に就任して、それぞれ各時代の歴史研究を分担し、新しい資料を組織的に利用して研究を深化させた。



## 先秦時代史研究

中国古代史では、松丸道雄によって先秦時代の研究班が組織され、昭和四十九年・五十年に「春秋戦国期列国の総合的研究」の課題のもとに、主として金文・石刻類の出土文字資料を検討して新たな視点から考察した。この研究には宇都木章、小倉芳彦、後藤均平が文献学の面から、関野雄が考古学の面から参加した。五十一年度から五年間は西周時代の青銅器とその銘文を研究し、『東洋文化』第五六号にその成果を発表した（翌年『西周青銅器とその国家』として東京大学出版会から刊行）。ついで五十六年度以降には、「殷周時代の文物とその社会構造」を課題として、持井康孝、飯島武次、量博満が新たに加わって、甲骨金文資料と青銅器を網羅的に調査し、個々の資料を読解・分析して、殷周時代の歴史の解明に努めた。

## 律令制の研究

同じ昭和四十九年から、隋唐帝国の構造を究明し、あわせて中国を中心とする東アジアの歴史的性格を考察するため、「東アジア諸国の律令制の比較史研究」の研究班が池田温によって組織された。この研究は、中国の律令制とそれを摂取した朝鮮、日本の律令制について、『唐律疏議』と『養老律』の会読を通じて究明しようとしたものであり、青木和夫、平野邦雄、武田幸男、堀敏一、岡野誠、窪添慶文が参加した。この研究の過程で官僚制の研究に焦点を置くことになり、さらに研究対象の時代を広げて、東アジアの前近代官僚制を比較して考察した。

宋代明代史研究  
と公私文書研究

宋代以後の歴史については、佐伯有一を中心とし、田中正俊、柳田節子、小山正明、西川正二、山下米子、濱島敦俊が参加して、農村の社会構造の展開を研究した。ついで、明代史については、昭和四十五年以降、歴史、思想、宗教、文学、美術史の諸専門分野の本研究所の研究者が共同して歴史の全体像を構築する目的で報告と討論が行われた。また五十年から本研究所所蔵の江蘇省宝応県の地主王氏等の家伝の文書を検討する研究班が作られ、滋賀秀三、久保亨、上田信、岸本美緒、白井佐和子、寺田浩明、濱下武志などが参加した。この研究は五十七年に就任した濱下武志が責任者となって継続され、「十七世紀以降東アジア公私



文書の総合的研究」の研究班のもとで、広く未公開の公私文書の組織的な調査を行った。とくに本研究所蔵の二千点以上にのぼる中国土地文書を調査し、嘉興懷氏文書など一、〇五四点の文書の整理を終えて、その成果を五十八年から『東洋文化研究所蔵中国土地文書目録・解説（上、下）』として刊行した。

近現代中国研究に関しては、福島正夫が主任として、「現代中国の法と経済」の課題のもとに研究班が長く研究活動が続けてきたが、佐伯有一はこれを引き継ぎ、研究対象として朝鮮を含め、さらに一八四〇年以降の近代史研究の研究班と合体させて、近現代の東アジアの改革の問題を総合的に研究した。昭和四十七年からは、東アジアにおける植民地支配の本質と、反帝国主義運動の展開を究明するため研究班を再編し、梶村秀樹、姜徳相、戴国輝、小島麗逸、加藤祐三の協力により研究が進められた。五十五年からはアジアの他地域の植民地支配・解放運動との比較研究を行い、東アジアについては田中正俊、小島晋治、中川学、森山茂徳、若林正文、小杉修二らの参加をえて進められた。

近現代朝鮮史に関しては前述の現代中国研究班のなかで研究を進めてきたが、昭和五十九年に宮嶋博史が着任し、「朝鮮における社会変動と民衆——李朝期から近代まで」の課題で研究班を組織した。

佐伯有一（昭和三十八年～五十八年在職）は、明清社会経済史に関して、「資本主義萌芽」の問題をめぐって都市の工業の発展を研究し、都市の絹織業をめぐる諸問題を解明した。さらに明代の新しい発展が全社会構造上にいかなる変化をもたらしたかについても研究を進め、「一六〇一年織備之変をめぐる諸問題」など一連の論文を発表した。また中国における資本主義の発展について主として金融資本の形成とその展開に注目した研究を行った。さらに民族闘争史についても、「労働者階級の形成と役割」などの論文を発表した。

松丸道雄（昭和四十五年以降在職）は甲骨文・青銅器銘文を主たる史料とし、考古資料及び文献を加えて、殷周時代の国家・社会の構造を研究した。ここでは、金文の史料性格を確定するため、金文の偽作問題を中心に、殷周青銅器の検討を行った。その後、本研究所蔵の甲骨資料の整理分析を行い、甲骨を綴合の上で分類し、二、一〇三片の写真と拓本を



集成して、昭和五十八年に『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字 図版編』として刊行した。また国内外に現存する多数の殷周青銅器を実物について調査し、蒐集した金文の写真資料のうち、殷・西周時代の分類目録を刊行した。

池田温（昭和四十六年以降在職）は、隋唐で完成された中国古代帝国の国制を体系的に研究し、律令制を対象として、律疏・令・勅格・式の本文を整理・訳解して、法及び制度の変質過程を考察した。また法の適用事例の個別的検討のため、敦煌、吐魯番などの出土文書の調査を詳細に行った。それと同時に、高句麗・百濟・新羅・日本等の古代国制における中国の影響をたどり、東アジア古代史の把握を深めた。昭和五十四年に唐代に至る現存籍帳を集めて検討し、『中国古代籍帳研究 概観・録文』（五十五年度学士院賞受賞）を刊行し、また仁井田陞『唐令拾遺』の増補のため編纂作業を進めている。

濱下武志（昭和五十七年以降在職）は、十九世紀を中心として中国と欧米、中国と東南アジアの経済関係を研究し、とくに海関資料・領事報告・中外の商工会議所報告などにもとづき、貿易および金融問題について分析した。これに関連して、華人資本の海外活動の究明のため、香港・シンガポールなどで金融機関・商会の実地調査を実施している。

宮脇博史（昭和五十八年以降在職）は朝鮮近代史を専攻し、総督府の土地調査事業の実態に関する基礎的な研究を行うとともに、李朝時代における農書、農法、水利灌漑などの農業史や、植民地時代における地主制について考察している。

## 助手

昭和三十七年以降助手に就任した者の業績については次のとおりである。石田米子（昭和三十七年～四十三年在職）は中国近代史を研究し、とくに太平天国、ついで辛亥革命時期の農民運動を研究し、梶村秀樹（三十八年～四十四年在職）は朝鮮近代史を専攻し、とくに北朝鮮の協同化運動の発展について研究した。濱島敦俊（四十年～四十七年在職）は明代の農村社会の変化について水利と役法改革を通じて研究した。加藤祐三（四十一年～四十八年在職）は中華人民共和国成立に至る時期の農村における権力構造と土地改革を研究し、小杉修二（四十九年～五十六年在職）は民国時代の政治経済構造を研究し、労働運動や蔣介石政権の形成過程を研究した。持井康孝（五十一年～五十八年在職）は甲骨・金文資料によって殷周時代の歴史を研究した。岸本美緒（五十四年～五十六年在職）は物価史に焦点を置いて、清代江南の社会経済史を研究した。

久保亨（五十六年以降在職）は民国時代の経済史を専攻し、とくに関税などの統計資料を分析して国民政府による関税



政策などについて考察している。上田信（五十七年以降在職）は明清時代の社会史を専攻し、とくに江南社会の定住経過、人口移動、宗族関係の変化などを分析している。谷豊信（五十九年以降在職）は東アジアの考古学を専攻し、古代東アジア諸地域の文化の地方差と相互の影響について研究している。

### 第三節 東アジア第二部門

#### 東アジア第二部門の沿革

本節では、中国を中心とする東アジア地域の宗教、思想、文学、美術の四研究分野について叙述する。本研究所在昭和十六年に設立された当初、すでに哲学・文学・史学部門が三部門の一つに配備された。しかし、当該部門を担当した所員は宇野円空と山本達郎であり、二人の研究対象地域は、現在の大部門制の区分でいえば南アジア部門に属するものであった。従って、事実上、前記の四研究分野についての研究が開始されたのは、二十四年一月に六部門制となり、哲学・宗教部門、文学・言語部門、美術史・考古学部門が設けられてから以降のことである。同年五月に、美術史・考古学部門に米沢嘉圃、哲学・宗教部門に結城令聞が、それぞれ教授として、十二月には窪徳忠が哲学・宗教部門の助教として迎えられ、中国の美術と宗教についての研究が開始された。文学については、三十四年五月に文学部教授小野忍が研究所教授を兼任し、三十七年に研究班を組織してから班研究が開始されたのである。

これら三部門は、昭和五十六年に大部門制に移行した以後は、東アジア部門の一翼として拡充され（通称東アジア第二部門）、宗教、思想、文学、美術の四研究分野を担当することとなった。以下、三部門時代の区分に従って、思想・宗教、文学、美術の三分野にまとめて各分野の研究の進展を述べることとする。

#### 思想宗教研究

思想・宗教研究の分野においては、結城令聞と窪徳忠が昭和二十四年に着任以降、結城は中国仏教を、窪



は道教と民衆との関係を研究した。これは、文化や社会の層位的構造を考慮した研究であった。二十七年には「中国における固有思想と外来思想との交渉」研究班が組織され、三十六年まで継続した。この班の目的は、外来思想である仏教が中国固有の思想や信仰と融合して中国的仏教として成立したこと、および中国固有の思想や信仰が仏教の刺激と影響を受けて道教という一宗教として成立したことという二点をふまえて、中国宗教史の研究は仏道二教の交渉史の研究にほかならないと認識し、その立場に立って二教を比較研究するところにあつた。はじめは、主任の結城と、窪の兩名によって推進されたが、やがて所外から吉岡義豊、野田幸三郎、塩入良道らの参加を得、所内からは小口偉一、米沢が一時期参加した。三十七年には「中国における仏教と道教」研究班と改められ、所外から、さらに泰本融の参加を得、所内から、三十三年に助手となつた鎌田茂雄が参加した。班主任は、三十八年に結城が退官した後は窪が担当した。

## 結城令聞

結城令聞（昭和二十四年—三十八年在職）は、インド仏教として最も典型的な唯識思想を解明し、『世親唯識の研究（上）』（三十一年）にまとめた。また、インド、中国、日本の浄土教を比較検討し、教団史および信仰の本質問題という観点から中国浄土教の成立を、親鸞の『教行信証』の成立過程の分析から日本浄土教の特質を、それぞれ究明した。日本浄土教との比較から中国浄土教が質的に庶民宗教となつていない点を分析したほか、とくに隋唐仏教の歴史的意義を問題とし、北魏・北周における廃仏事件との関連や、中国固有思想を摂取する過程について考察した。

昭和四十一年（一九六六）には「中国の思想と宗教」研究班に改め、仏道二教の文献の基礎的研究と交渉史の解明をめざした。さらに、中国宗教が東アジアの周辺諸地域に及ぼした影響を重視して、とくに沖縄を中心の実態調査を行った。『東洋文化』第四八・四九合併号（四十五年）はその成果である。江島恵教と蜂屋邦夫が新たに参加し、四十九年からは窪教授の退官にともなつて鎌田教授が主任となつた。

また、四十三年に蜂屋が助手に採用されたことを契機に、窪、鎌田、蜂屋は、尾上兼英の協力を得て「全真教教理の研究」班を組織し、四十七年まで、『丹陽真人語録』を解説し、『洞玄金玉集』の一部を研究し



た。

窪徳忠

窪徳忠（昭和二十四年～四十九年在職）は、金代に成立した新道教の研究から出発し、その代表の全真教を教団史、三教調和思想、庶民性など、さまざまな観点から解明した。『中国の宗教改革——全真教の成立——』（四十二年）は長年にわたる蓄積の成果である。道教史全般については、老子化胡説や北周通道觀の性格の再検討、一貫道などの民衆的道教の考察、さらに道藏の校訂などの基礎的な作業に至るまで、実証的にして幅ひろい研究活動を行なった。また、道教の本質を解明するために、日本に伝わった庚申信仰を文献研究と実態調査の両面から検討した。そのため、まず朝鮮への伝播の問題とし、とくに李朝の三戸信仰の実態を究明した。日本については、いくつかの島嶼を重点的に実態調査した。『庚申信仰』（三十一年）、『庚申信仰の研究——日中宗教文化交渉史——』（三十六年）、『同年譜篇』（三十七年）、『同 島嶼篇』（四十四年）はその成果である。とくに沖繩については、祀られる神々を中心に習俗の問題を調査し、『沖繩の習俗と信仰——中国との比較研究——』（四十六年）に結実させた。

中国古代礼制研究班

昭和四十八年から、「中国古代礼制の研究」班が組織され、賈公彦『儀礼疏』の「士冠礼」、「士昏礼」部分を解読した。これは、主として四十九年に助教として就任した蜂屋によって、五十八年まで継続された。学内外から、戸川芳郎、竹田晃、今西凱夫、佐藤保、沢田多喜男、高橋忠彦、影山輝国、その他多数の参加を得、蜂谷が編集してその成果を『儀礼士冠疏』（五十九年）、『儀礼士昏疏』（六十一年）として刊行した。「中国の思想と宗教」研究班（主任鎌田）は、儒仏道三教の文献・教理の研究と、三教交渉史を究明することに力を注いできたが、昭和五十二年以降は「三教交渉史研究」班となり、鎌田、蜂屋のほか、福井文雅、平井俊栄、袴谷憲昭らが参加した。

中国の思想と宗教研究班

中国仏教および六朝の思想研究

大部門移行後、鎌田班は昭和五十八年から「中国仏教思想の形成過程」研究班に改まり、池田魯参、木村清孝、吉津宜英、石井修道らが新たに参加した。蜂屋班は五十九年から「六朝隋唐時代の思想と礼制」研究班に改まり、丘山新、末木文美士らが参加した。これら両班は相互に協力して、中国の宗教・思想の総合的



理解をめざしている。鎌田班の成果には「『北山録』訳注」一、二、三（五十五、五十六、五十七年）があり、蜂屋班の成果には『東洋文化』第五七、六二、六六号（五十二、五十七、六十一年）がある。

鎌田茂雄

鎌田茂雄（昭和三十三年以降在職）は、華嚴思想の形成と展開を究明して『中国華嚴思想史の研究』（四十年）を著し、仏道二教の思想上の交流と道教經典の成立に及ぼした仏教思想の影響を解明して『中国仏教思想史研究』（四十三年）を公刊した。中国、日本、朝鮮の華嚴学を解明する一方、華嚴と禪との交渉をとくに圭峯宗密を通して検討し、『宗密教学の思想史的研究』（五十年）（五十一年度学士院賞授賞）に結実させた。中国仏教史全体を眺望すべく、『中国仏教史』（既刊第一卷・五十七年、第二卷・五十八年、第三卷・五十九年）を執筆中である。四十五年以来、香港、台湾、韓国、中国における仏教儀礼の調査に従事し、中国仏教の成立と展開を東アジア仏教圏の形成と関連させて考察した。多数の仏教関係資料を公刊する一方、現地調査の成果を『中国の仏教儀礼』（六十一年）に集大成した。

蜂屋邦夫

蜂屋邦夫（昭和四十三年以降在職）は、まず全真教の經典「重陽真人金闕玉鎖訣」を分析して、その身体観、修養論を解明した。ついで、中国思想史を三教の交渉関係としてみる基本的な観点から、六朝思想の展開に関して多数の論考を発表して究明した。研究の特色は、思想を内在的に理解するために文献の正確な読解に努める点にある。一貫して中国的思惟方式の解明に努め、『中国の思惟』（六十年）はその成果の一部である。また『儀礼士冠疏』（五十九年）『儀礼士昏疏』（六十一年）を編集・刊行して、六朝隋唐における儒教思想の展開の実態を提示した。

思想宗教研究分野の助手

東アジアの思想と宗教に関する研究分野には四人の助手が在職した。近藤邦康（三十四年～四十年在職）は、章炳麟と李大釗を中心に解明するなど、清末から民国初にかけての思想的考察を主題に研究した。江島恵教（四十一年～四十九年在職）は、インド中観思想の展開を Bhavavivaka を中心に研究し、空性と論理学との関連の実態を明らかにした。岡本サエ（四十六年～五十二年任職）は、清代禁書の著者達の思想と西学輸入の思想的基盤について研究した。吉田純（六十年以降在職）は、清代學術に關し中国思想史・精神文化史を一貫して捉える立場から、段玉裁の經学について研究をすすめている。

文学研究分野

文学研究の分野では、昭和二十八年（二五三）から小野忍講師が「土地改革と文学」などのテーマで研究し



た。三十七年に至って、小野教授（兼任）を主任とする「近代中国の思想と文学」研究班が、丸山昇、仁井田陞、野村浩一、竹内実、近藤邦康、木山英雄、新島淳良らの参加を得て組織された。四十年三月には小野が兼任を辞め、班名を「中国の思想と文学」に改めて、四月から窪教授が、十一月以降は助教として赴任した尾上兼英が主任となった。

#### 小野忍

小野忍（昭和二十七年～三十年在職、三十四年～四十年兼任）は、茅盾や魯迅を研究して文学におけるリアリズムの問題を究明した。また「革命文学」（三十二年）ではプロレタリア文学の歴史と性格を考え、『現代の中国文学』（三十三年）では主要な作家と作品を通じて現代文学の歩みを示した。他に多数の翻訳の業績がある。

#### 中国の思想と文学研究班

「中国の思想と文学」研究班は、思想方面では民国初の西歐思想の受容問題などを研究し、文学方面では小野が旧文学と現代文学、尾上が小説史を担当し、班員は各自の専門をもって協力した。山之内正彦、高田淳、前野直彬、溝口雄三、田仲一成らが加わった。昭和四十四年に編成を変え、高田、溝口、西川正二が「清末民初の革命思想と運動」を、尾上、丸山、竹内が「一九三〇年代文学の諸問題」を研究した。四十七年には「明清時代の思想と文学」「近現代の思想と文学」に改められ、前者は溝口、小林（岡本）サエ、尾上、田仲、伝田章、青山宏が、後者は高田、丸山松幸、三宝政美、尾上が担当した。同年に田仲が助教として赴任したことにより、翌年には「戯曲小説研究」班も組織され、『西廂記』研究が推進された。同年に伊藤虎丸、五十年に平山久雄、昭和五十一年に芦田肇が新たに参加した。五十二年からは「戯曲小説研究」と「一九三〇年代文学の研究」の二班となり、前者に菊田正信、吉川良和、後者に近藤龍哉、佐治俊彦、尾崎文昭が漸次新たに参加した。大部門移行後、両班は独立して「中国戯曲小説研究」（主任田仲）と「一九三〇年代左翼文芸運動」（主任尾上）となった。後者には新村徹が加わり、田仲班は六十年に「閩粵の地域社会と地方文学」に変わり、班員に尾上兼英、浜下武志、王崧興、片山剛、戸倉英美、西川喜久子が参加した。



『東洋文化』第四四、四五、五六、六五号（昭和四十三、四十七、五十一、六十年）は一九三〇年代文学研究の、第五八、六一号（昭和五十三、五十六年）は戯曲小説研究の成果である。また、尾上を代表者として、昭和五十四、五十五、五十七、五十九年に、東南アジアにおける中国伝統芸能について総合的な現地調査を行った。

## 尾上兼英

尾上兼英（昭和四十年以降在職）は、明清の白話小説を中心に中国小説を研究し、語り物の形式と内容を保存した話本が、地主文人の消閑の具へと変質して擬話本となる展開過程を分析した。「明代白話小説ノート（一）、（二—一）」（昭和四十二年、五十六年）はその成果の一部である。これと関連して説書、説唱演芸の研究をすすめ、日本や東南アジア各地の華人社会に残存する演芸、芸能の実態調査を行った。その成果は、「東南アジア華人社会における演芸」（五十三年）や「東南アジア華人社会の伝統芸能（一）、（二）」（五十五年、五十六年）などの一連の論文に示されている。また、一九三〇年代左翼文芸運動について、民間文芸形式を発掘することによって究明している。そのため、一九三〇年代の文芸雑誌の調査・整理に着手し、『一九三〇年代中国文芸雑誌（一）』（昭和四十六年）その他を編集した。

## 田仲一成

田仲一成（昭和四十七年以降在職）は、中国の地方演劇史を研究し、宋元から明清に至る歴史的展開の過程を、それぞれの時代の社会構造、社会背景との関連において、総合的に解明した。また、古代から近世に至るまでの中国における劇文学発生のしくみを理論的に構築した。さらに、香港、台湾、シンガポール、マレーシア等に見られる華南系演劇の調査を数年にわたって連続して行い、文献資料との関連を考察した。『清代地方劇資料集（一）』『同（二）』（四十三年）は基礎的資料を収集、整理したものであり、『中国祭祀演劇研究』（五十六年）、『中国の宗族と演劇』（六十年）の両著は長年にわたる文献的研究と現地研究の成果である。

文学研究分野の  
助手

東アジアの文学に関する研究分野には二人の助手が在職した。木山英雄（昭和三十五年～四十一年在職）は、近世・近代小説の意識と発想に重点をおき、水滸伝や魯迅・周作人の思想について研究した。山之内正彦（三十九年以降在職、五十八年以降センター所属）は、中晚唐詩、とくに李商隱の研究をすすめ、かたわら明末清初の王船山を研究し、詩人の系譜に新視点を提供した。



美術史研究分野については、昭和二十四年就任以来米沢嘉圃は、中国水墨画史、明清絵画史、北宋文人画、中国山水画などの研究を題目として個別研究を行い、三十五、三十六年に「唐宋絵画研究」の題目で「中国における固有思想と外来思想との交渉」研究班に参加したが、昭和三十八年に至ってはじめて、鈴木敬、川上涇、戸田禎佑の協力を得て、「中国絵画の伝統と創造」研究班を組織した。同班は四十二年まで、現存遺品の検討を基礎として絵画の伝統性を考察し、あわせて、様式的伝統性と密接する時代的、個人的な様式の創造の問題をも検討した。主任は、四十二年、米沢教授の退官にともない、四十年に助教として就任した鈴木にかわった。海老根聡郎、吉沢忠が新たに参加した。

## 米沢嘉圃

米沢嘉圃（昭和二十四年～四十二年在职）は、まず中国歴代の農民画の起源を考え、文化や社会との関連において農民画の特殊性の根源を解明した。また、中国絵画に見える西洋画法の影響を分析し、それが伝統的画法との便宜的な折衷であることを究明した。ついで白描画の源流や、花鳥画、文人画、木刻画などについて考察し、中国絵画の歴史の変遷を考察した。『宋の花鳥画』（三十一年）、『中国の美人画』（三十三年）は文化史的意義を提起したものであり、『中国の絵画』（三十五年）は台湾故宮博物院調査の成果を盛り込んだ通史である。また、日中絵画の関連を問題にし、『文人画』（四十二年）では中国文人画の日本の変容と、中国絵画の本質を論じた。気韻という造形感情が変容する時期によって絵画史の時代を区分し、中国絵画の様式形成と展開を解明して様式史としての方向づけを行った点に特色がある。

昭和四十三年（一九六八）から五十年までは「宋元仏画研究」を主題とし、日本国内に現存する宋元仏画を調査して研究素材を蒐集した。とくに「羅漢図・十王図」を重視し、中国絵画の制作期を決定したり、日本における仏画、水墨画などの成立の経緯を考えるための資料として活用し、調査作品の目録も公刊した。班員には浜田隆、小林忠、嶋田英誠が新たに参加した。日本現存の中国絵画の資料はかなり集積されたので、五十一年から「米国所在の中国絵画に関する実証的研究」に主題を改め、五十年後半に米国・カナダ両国で行った調査によって得た資料にもとづく研究に移った。いくつかの科学研究費や調査研究事業による精力的

宋元仏画研究と  
欧米所在資料の  
収集



な資料の調査収集活動によって、ヨーロッパ、東南アジアの中国絵画資料も蓄積され、これら膨大な資料を整理し、作品目録も作製した。主題は、五十三年に「日本に現存する中国絵画の実地調査、資料蒐集とその研究」、五十五年に「現存する中国絵画の包括的再検討と国内に於ける補足的調査」に改められたが、いずれも収集資料の補完と整理、研究を目指したものである。渡辺明義、湊信幸、小川裕充が新たに加わり、主任は、五十六年、鈴木教授の退官にともない、四十六年に講師として就任した戸田助教授に代わった。

鈴木敬（昭和四十年～五十六年在職）は、おもに中国絵画の様式研究を行った。「山水画様式の系譜」（角川版『世界美術全集』所収）では宋元の山水画を中心に、北方と南方の様式の成立、発展、衰退の問題を、芸術感情や筆墨技法、画面構成などの点から概観し、「画学を中心とした徽宗画院の改革と院体山水画風の成立」（四十年）および「明代画院制について」（四十年）において、北方系山水画様式の一変容としての南宋院体画風、および明代浙派様式の成立の基盤としての宋代と明代の画院制について詳論した。浙派についての研究は『明代絵画史研究・浙派』（四十三年）に結実した。さらに、六朝に始まり唐代に形式的完成をみた青緑山水画風について、その成立過程、北宋・南宋山水画様式への影響などを研究した。

## 収集資料の整理

昭和五十八年に主題を「現存する中国絵画の包括的再検討と国内・国外に於ける補足的調査」に改め、収集された膨大な写真資料は整理されて、『中国絵画総合図録』として五十七年～五十八年に刊行された。第一巻は「アメリカ・カナダ篇」、第二巻は「東南アジア・ヨーロッパ篇」、第三巻は「日本篇Ⅰ博物館」、第四巻は「日本篇Ⅱ寺院・個人」、第五巻は「総索引」である。これら一連の活動によって、中国絵画史研究の状況は一変し、美術史研究分野は、国内外の研究者が利用する「中国絵画史研究の資料センター」の性格をもつに至った。この間、柳沢孝、関口正之、宮崎法子が新たに参加した。

## 戸田禎佑

戸田禎佑（昭和四十六年以降在職）は、中国絵画の様式研究を推進した。「中国絵画における形態の伝承」（四十七年）では、そうした問題意識を理論的に展開したものである。また、日本国内の未検討の資料が数多く遺されている元代の民



間画工の手になる道釈人物画を用いて、従来不明な点の多かった元代絵画史に新たな光をあてた。「元代道釈画に関する諸問題」(昭和五十年)はそれに関連した論考である。さらに、南宋末の禅僧画家である牧谿の画風の成立について、江南系絵画の伝統にたつものとして捉え、五代・北宋以来の江南系絵画の変化を様式的観点から再検討し、牧谿芸術の本質に肉薄した。論考に「牧谿・王潤」(四十八年)の成果がある。

#### 美術研究分野の 助手

東アジアの美術に関する研究分野には二人の助手が在職した。島田英誠(五十年～五十四年在職)は、北宋山水画に属する各作品の編年と様式展開全体について、燕文貴派の遺品を基準として研究した。小川裕充(五十四年～五十七年在職)は、唐宋山水画について、細部の様式やマチエール、イマジネーションなどを総合した観点から分析し、絵画史上に位置づけた。

#### 共同部門研究

昭和五十六年に大部門制に移行してから以降は、四研究分野が共同して行う部門研究として「東アジアにおける庶民文化の形成と展開」のテーマをかかげ、専任の研究員全員がそれぞれの専門分野から考究している。

### 第四節 南アジア部門

#### 部門構成の変化

南アジアは、ここでは、東南アジア諸国からインド亜大陸諸国・スリランカまでの地域を総称する。この地域は本研究所創設のときから研究の対象とされ、当時「南方」地域といわれた東南アジアについて歴史・宗教・経済の面から研究が行われた。ついで学問分野を単位とする部門に加えて地域区分にもとづく部門を設ける方針が樹立されると、昭和三十五年(一九六〇)に南アジア部門、ついで四十八年に東南アジア経済・社会部門が設けられた。五十六年の大部門制への移行の結果、これらの部門は南アジア部門として改組拡充さ



創設当初の東南  
アジア研究

れ、経済・社会、政治過程、歴史・考古、宗教・文化の四研究分野を擁することになった。

創設当初この研究分野を担当したのは、哲学・歴史・文学部門の宇野円空教授と山本達郎助教であり、それぞれ東南アジアの民族宗教とヴェトナムの歴史を専攻した。東南アジアは、諸民族の基底をなす文化の上に、古くからインド文化、中国文化、ついでイスラム文化、キリスト教文化を受容し、それらが融合して特色ある歴史が形成されたので、その文化と社会は多様である。この解明のためには、歴史学的・宗教学的な考察が特に重要である。戦時中は「東洋諸民族の相互的交渉」「東亜に於ける祖先崇拜の諸形態」を共通の課題とし、囑託の研究者とともに研究を進めた。昭和二十一年に宇野教授が停年退官したが、山本助教は文学部へ転任後も引続き本研究所の兼任として研究活動を行い、「ユーラシアにおける民族と文化」「東洋における国家構造の史的研究」の研究室において、東南アジアの歴史・文化の研究を発展させた。

宇野円空

宇野円空（昭和十七年～二十一年在職）は、わが国の東南アジア宗教研究の開拓者であり、マレーシアの稲米儀礼について研究したあと、東南アジアの神観・祖先祭祀について考察した。そこでは部族の宗教形態を生活様式との関連において検討し、また部族間の比較によって各部族の宗教の特質を明らかにして、アジアの民族宗教学的の確立に努めた。

戦後の南アジア  
研究

戦後南アジア諸国はあいついで独立して大きく変わった。この変化に応じて、日本でも新しい視点に立つ南アジアの本格的な研究が始まり、従来等閑視されてきた問題の開拓が進められるようになった。昭和二十五年ごろから、インドをはじめとする諸国政府の奨学金などによって、長期間にわたって現地に滞在して研究できるようになり、図書・雑誌もこれらの国々から購入できるようになった。本研究所では、二十二年に助手に就任した荒松雄が十六・十七世紀フィリピンとスペインの貿易史研究から移って、インド史の本格的な研究に着手し、十九世紀のイギリス人のインド村落共同体論に関する論文を発表したあと、二十七年にイ



ンドに留学した。続いて中根千枝、中村平次、山崎利男の三名の助手もインド政府留学生としてインドで研究することになった。

南アジアの研究は、昭和二十六年から二十八年まで、「ユーラシア大陸の民族と文化交流」や「東洋における土地制度史」の研究班のなかで進められ、三十一年に至って「南アジアにおける社会と文化の変遷」と題する研究班が組織された。これは、東南アジアから西アジアにかけての専任の研究者が増加したことにより、歴史学、社会人類学などの諸分野から基本的な問題を総合的に研究しようとしたものであって、七年間にわたって継続した。この間、三十六年に本研究所を母胎として「東京大学インド史蹟調査団」が組織され、デリー諸王朝時代のイスラム建造物の現地調査研究が行われた。これについては本節の最後に述べる。

東南アジアの諸地域はインド亜大陸からの文化の影響が大きいこと、また植民地時代以降には両地域で共通する問題が多いことなどの点に加えて、日本の学問研究の歴史的事情もあって、東南アジア研究とインド亜大陸の研究とは共同に進められてきた。しかし、研究の進展にともない、二つの地域の別々の研究班が組織された。

東南アジアの研究班は、昭和三十九年(一九六四)に組織されて以来、山本達郎、橋本秀一、築島謙三、山田三郎、高橋彰、池端雪浦、原洋之介が参加して、歴史学、経済学、文化人類学、政治学、人文地理学など諸分野から研究を進展させてきた。共通課題としては、四十二年は「東南アジアの社会と文化」であったが、四十三年に「東南アジアの国家形成」、さらに四十六年・四十七年には「東南アジアの社会経済組織」と改め、東南アジアの基本的問題について研究を行った。

山本達郎(昭和十七年~四十二年在职)は、東南アジア史の再構成に努め、とくにヴェトナムと中国との政治交渉史、



ヴェトナム法制の歴史と中国法の影響について研究した。戦時中には十世紀に安南（ヴェトナム）が中国から独立する過程を究明し、昭和二十五年には元明兩朝と安南との交渉に関する基礎的な研究をまとめて『安南史研究 Ⅰ』（二十六年度学士院賞受賞）として刊行した。ついで十九世紀以後の安南の田簿・丈量の記録を調査して土地制度と家族制度を研究した。これらと平行して『歴朝憲章類誌』および『黎朝刑律』の校訂の作業を進めてほぼ完成した。このほか、インドのイスラム建造物の調査団の団長として活躍し、また中国の南北朝から唐代にわたる土地制度・賦役制度について敦煌文書の分析を通じて研究した。

## インドの研究班

インドの研究班は、昭和三十八年以降、支配体制と社会構造の歴史的変遷の研究に重点を置き、荒松雄を班主任とし、山崎利男、松井透、中村平次、古賀正則、中根千枝、山本達郎、長崎暢子が参加した。これはわが国のインド史研究の中心をなしたものであって、上記のメンバーが中心となって、四十四年に『インド史における土地制度と権力構造』、ついで四十六年には『東洋文化』第五〇・五一合併号を刊行して、共同研究の成果を発表した。（後者は論文を増補して『インド土地制度史研究』として刊行された。）また四十八年から七年間、「インド史における宗教と社会」の班研究を行った。これは、ヒンドゥー・イスラム兩宗教の実態とインドにおける宗教と政治の関連を現地調査にもとづいて究明しようとしたもので、荒松雄、山崎利男、鈴木斌、田中敏雄、月輪時房、長崎暢子が参加した。

昭和五十六年の大部門制への移行にともない、南アジア部門の研究課題として「南アジアにおける支配体制と社会構造」をかかげるとともに、別に「植民地主義と民族形成」「南アジア史における宗教と社会」をテーマとする班を組織して、東南アジアとインド亜大陸の諸問題を研究した。五十七年に荒教授が停年により退官し、翌年に柳沢悠が助教として就任した。これにともなって、「十九―二十世紀南アジアにおける社会変動と民衆意識」の研究班を改組し、山崎利男、辛島昇、松井透、長崎暢子、古賀正則、中里成章、柳沢悠、中村平次、加納啓良、古田元夫、白石昌也、石井米雄、友杉孝が参加した。

大部門制移行と  
新たな班編成



荒松雄（昭和二十二年～五十七年在職）は、デリー諸王朝時代の支配構造を研究し、スルターンの権限・地位とその継承、貴族階級の性格と封地について検討し、同時に近現代史研究をまとめて、『現代インドの社会と政治』を刊行した。ついで三十六年からデリー諸王朝時代のイスラム建造物の調査研究に従事し、その調査結果と文献資料や伝承とを合せて分析し、この時代の歴史研究に新しい分野を開拓し、またインドのムスリム政権の性格やイスラム教の浸透をめぐる宗教と社会の関係について考察した。イスラム建造物については、墓の年代と埋葬者に関する一連の論文と諸種の水利施設の役割に関する論文などがある。とくにスーフイーの聖者のダルガー（聖廟）の宗教的役割に注目してその詳細な研究を行い、五十二年に『インド史におけるイスラム聖廟』（五十三年度学士院賞受賞）を刊行した。

山崎利男（昭和二十九年以降在職）は、十二世紀以前のインドの歴史を研究し、とくに国家権力と土地制度について碑文を主要な資料として考察し、「四―十二世紀北インドの村落・土地の施与」などの論文を発表した。また古代ヒンドゥー法典であるダルマシャーストラにみえる家産と相続などに関する規定の検討を行った。十二世紀以前の歴史の研究と並んで、三十六年以後に、イギリス植民地時代の歴史に研究を拡げ、とくにその法制史の分野を研究し、ヒンドゥー家族法、司法制度、イギリス法導入に対するイギリス人とインド人の思想やインド憲法について考察した。

松井透（昭和四十年以降在職）は、インド近代史、とくにイギリス帝国の植民地政策史とインド経済史を専攻し、イギリス帝国の支配とインドの社会経済との関係につき、土地制度、鉄道、商品作物生産の面から考察し、十九世紀インド経済の性格に関する国際的論争に寄与した。それと同時に、十九世紀におけるイギリス人のインド支配の理念の変遷を考察し、代表的な人物を取り上げてその政治思想を検討した。その後、植民地支配下の農業の発展と村落生活の変化につき数量的実証をめざして、電算機による統計資料の分析を行い、その成果を五十二年に『北インド農産物価格の史的研究』にまとめた。さらに北インドのメーラトという一地域を選んで、十九世紀の経済と社会の歴史を数量分析を用いながら研究している。

柳沢悠（昭和五十八年以降在職）は、十九世紀以後のインド経済史を研究し、近年実施した南インドの現地調査にもとづき、この地域の農村の一〇〇年間の経済と社会につき、とくに諸階層の変化に焦点を置いて研究し、六十年に *Socio-Economic Changes in a Village in the Paddy Cultivating Area in South India* を発表し、引続きこの地域の農民の経済生活について電算機をも使って分析している。



インド研究の助手

このほか、インド研究には五人の助手が在職した。中村平次（昭和三十二年～三十八年在職）はインド民族運動の展開を研究し、とくにナオーロージー、テイラク、パール、ガンディー、ネルーの思想と行動を分析した。古賀正則（三十二年～三十八年在職）はインドとパキスタンの土地改革と独立前の労働運動などを研究し、月輪時房（三十八年～四十四年）はデリー諸王朝時代のイスラム建造物を研究した。長崎暢子（三十九年～五十一年在職）は十九世紀北インドの農村社会と一八五七～五八年の大反乱を研究した。中里成章（五十二年～五十八年在職）は一八六一年の東部インドの藍一揆と十九世紀七十年代から今世紀はじめにかけてのダッカ地方の農業構造について研究した。竹中千春（五十九年以降在職）は、今世紀インドの政治構造を研究し、とくに英連邦史における非植民地化過程について考察した。

東南アジアの研究班

東南アジア研究については、昭和四十八年以來松井教授が責任者となり、関寛治、山田三郎、原洋之介、白石隆、高橋彰、池端雪浦、加納啓良と研究を進めてきたが、五十三年から五年間、東南アジアの社会、経済、政治の構造と、それらの植民地支配時代から現在に至る変化を検討した。東南アジアの複雑な社会をめぐっては種々な理論的枠組みが提出されたので、それらのいくつかについて個別的研究をふまえて新しい角度から再検討した。『東洋文化』第六四号（特集「東南アジア社会論」）はその報告で、加納啓良、古田元夫、原洋之介、白石昌也、杉原薫の論文が収められている。

加納啓良

加納啓良（昭和五十五年以後在職）は、インドネシアの経済を研究し、東部と中部ジャワ農村調査の報告をまとめ、土地所有、農業労働、労働移動に焦点をおいてジャワの農業発展と社会変容を考察した。これと関連して、植民地時代の経済史について、統計資料を分析しながら、水稻の地域構造などを解明した。

東南アジア研究の助手

助手としては、池端雪浦（昭和四十一年～四十八年在職）はフィリピン史を研究し、パラングイ（聚落）の組織・制度を分析し、また十九世紀の経済変化と革命について考察した。また白石隆（五十年～五十四年在職）はマラヤ華僑社会の政治社会とインドネシアの民族運動を研究した。土佐弘之（六十年以降在職）は、インドネシア、フィリピンにおける経済開発による社会変動と政治体制の変容を研究した。



## 東京大学インド史蹟調査団

インド史蹟調査  
団

東京大学インド史蹟調査団は、昭和三十四年、山本達郎を団長、荒松雄を副団長として組織され、十三世紀から十六世紀までのデリー諸王朝のイスラム建造物の調査研究を目的とするものであった。デリー地域などのイスラム建造物の調査研究がインドでも欧米でもはなはだ不十分であるうえ、建造物自体の破損がいろいろしく、周囲に住宅が急速に建てられている状況から、建造物の網羅的調査が緊急に必要であった。このためインド考古学局の援助をも得て、調査団が派遣されることになったのである。

第一次第二次調  
査

第一次調査は昭和三十四年十月末から五カ月、ついで第二次調査は三十六年十一月から四カ月実施され、山本と荒のほか、月輪時房、三枝朝四郎、大島太市が団員として参加した。主たる調査対象はデリーとその近郊にあるモスク、墓、城砦、宮殿、住居、学校の建造物と、井戸、水門、橋などの水利施設であり、それと関連して北インドとデカンの各地を訪れて多数の遺蹟を調査した。調査団は、現地において、遺蹟の状態の観察と記録、写真撮影、地上立体写真撮影による測量方法を含む各種の測量作業、および拓本の採取などを行い、またこの研究に関連する文献の蒐集や複写などを行った。

成果

その成果は、『デリー：デリー諸王朝時代の建造物の研究』、大型本三冊として四十一〜四十三年に出版されて、世界の学界に大きな貢献を果たした。第一巻「遺蹟総目録」は、デリー地域に現存するデリー諸王朝時代に属すると推定される約三八〇のイスラム建造物を網羅的に採録したもので、各建造物につき、モスク、墓建築などに分類して年代的に整理した上で、その形態と構造、および歴史的問題点を記述した。第二巻「墓建築」では四つの代表的な墓建築を詳細に調査・記述し、あわせてこの時代の墓建築の展開を三期に分かって歴史を建築技術などの点から述べた。第三巻「水利施設」は八つの井戸、バーオリー、堰堤と水門を選んで調査検討し、当時の歴史事情から水利施設の役割を明らかにした。



## 第五節 西アジア部門

西アジア部門は、アフガニスタンから北アフリカまでの地域を研究し、あわせて内陸アジアをも研究対象とする。

西アジア研究の  
開始

本研究所において早くから西アジア研究に着手したのは、江上波夫、飯塚浩二、小口偉一であった。江上波夫は、考古学の立場から研究対象を北アジア・内陸アジアから西アジアへと拡大して、昭和二十八年（一九五三）に西アジアの先史遺跡を視察調査し、三十一年に「東京大学イラク・イラン遺跡調査団」が組織された後は、その団長として数次にわたる発掘調査を行った。同調査団については本節末尾で詳述する。飯塚浩二は、西欧中心的世界史認識に対してアジアの主体性を重視する視座から世界史を見直すための手がかりとして西アジア研究の重要性に着目し、「東洋史と西洋史とのあいだ」などの問題提起的な論文を発表した。小口偉一は、宗教学の立場からイスラム教に関心を抱き、近代イスラム宗教運動などについて研究した。

西アジア先史考  
古学研究

当初、西アジア先史考古学研究は、江上波夫を中心として、「東洋考古学の諸問題」、「ユーラシアの民族と文化」の研究班のなかで進められ、メソポタミア北部の原始農耕集落遺跡の発掘調査にもとづき、文明の起源とその初期の発展の様相の解明が試みられた。その研究成果は『東洋文化』第二五号（昭和三十三年）に発表された。昭和三十三年から石田英一郎・泉靖一などによって南米アンデス文明遺跡の発掘調査が進められると、三十七年から四年間、「新旧両大陸における文明起源の比較研究」の研究班を組織して、メソポタミア・アンデス両文明を中心に据えて、食料生産革命から王朝の成立に至る各段階にみられる文化の内容を詳細に比較検討した。



三十六年から三年間、「オリエント文明と東亜文明の交流の研究」の課題のもとで、江上波夫を中心に考古学・美術史の研究班を設けて、西アジアと東アジアの文化交流について研究し、土器・青銅器文化の交流、およびササン朝期ペルシア文化の日本・中国への伝播を研究した。ついで四十年以降には、イランのササン朝期の有名な遺跡ターク・イ・ブスターンの摩崖浮彫の調査が行われ、東西文化交流史研究における新しい領域が開拓された。

他方、昭和三十年に「近代西アジア研究」班が組織された。これはわが国において著しく未開拓であった近代西アジアの政治、経済、社会、文化の諸側面にわたって広く研究し全般的な展望をたてることを目的とするものであって、飯塚浩二を主任とし、小口偉一、大野盛雄、板垣雄三、加賀谷寛、西野照太郎が参加して共同研究を行った。この研究班は三十五年と四十年に『東洋文化』の第二九号と第三八号を特集号として諸論文を発表した。そこには西アジア各地で調査研究した報告も含まれており、これらの論文は当時のわが国の研究状況を示している。

ついで、昭和四十二年に飯塚・江上両教授が退官し、翌四十三年には西アジア歴史・文化部門が設置され、こうして本研究所の西アジア研究は新しい段階に入った。それ以後十余年間は次の四つの問題に焦点を置いて研究が進められた。

第一は先史時代の研究であって、イラク・イランの遺跡発掘調査にもとづき、松谷敏雄、曾野寿彦、池田次郎、堀内清治が、考古学、文化人類学、形質人類学、建築学の面から、文明の起源に関する諸問題を総合的に研究した。さらにメソポタミアにおける都市国家の問題について新規矩男、黒田和彦が研究した。

第二はバルティア・ササン朝期ペルシア文化の研究であって、深井晋司を中心に、堀内清治、増田精一、杉山二郎が参加し、イラン各地を踏査して、東西文化交流史の視点から多くの新資料を発見した。またイラ



ンのターク・イ・プスターンの遺跡について美術史・建築学の面から詳細な調査を行い、その報告書四冊を四十四年から五十九年までに刊行した。

イスラムの宗教  
思想と社会の研究

第三はイスラムの宗教思想と社会の研究であって、昭和四十六年に講師として着任した中村広治郎（四十七年助教に昇任）がイスラム神秘主義・社会思想を、助手の佐藤次高が中世イスラム社会を研究して、当時わが国における未開拓な分野の本格的な研究を開始した。

西アジア農村研究

第四は西アジア農村の社会構造研究であって、大野盛雄は「アジアの農村」研究班の主任としてアジア諸国の農村の実証的な比較研究を進めるとともに、西アジアの農村についても田中紀彦、佐藤次高、後藤晃、大岩川和正が研究班に参加して、総合的研究を行った。これと並行して、大野盛雄は「西アジア農村の実証的（人文地理学）研究」班を組織して、田中紀彦、後藤晃、安部喜也、加納康彦とともに、四十五年、四十七年、四十九年の三回にわたって、アフガニスタン、イラン、トルコの現地調査を行った。

西アジア大部門  
の研究

このような発展のなかで、昭和五十三年に西アジア政治・経済部門が新設され、ついで五十六年の本研究所の大部門制への移行にともない、大部門としての西アジア部門が設けられ、経済・社会、政治過程、歴史・考古、宗教・文化の四研究分野を擁することになった。その後、西アジア部門研究としては、「西アジア文化の歴史的形成と現代的課題」を共通の課題とした。研究班としては、深井晋司を主任とする「ササン王朝時代における摩崖浮彫の研究」班は、ターク・イ・プスターン遺跡の調査研究を継続して進めた。中村広治郎を主任とする「イスラム文明の総合的研究」班は、大野盛雄、加藤博、奴田原睦明、永田雄三、中原道子、秋本耿郎の参加を得て、イスラム成立以降の西アジアの総合的研究を目指した。また、大野盛雄を主任とする「アジア農村の現地研究の方法と過程」研究班は、後藤晃の参加を得て、イラン、アフガニスタンの農村の実証的研究を進展させた。



昭和五十七年に中村助教が文学部に転出したが、五十八年には鈴木董が、五十九年には鎌田繁が助教に就任した。翌六十年には、深井教授が停年退官の直前に急逝し、大野教授は停年で退官した。

江上波夫

江上波夫（昭和二十二年～四十二年任職）は、三十一年以来五次にわたって「東京大学イラク・イラン遺跡調査団」の団長として発掘調査に従事し、わが国における西アジア先史考古学を進展させるとともに、西アジアにおける文明の起源・形成、イランを中心とした東西交流、美術の誕生に関する諸問題について多くの論著を著した。

中村広治郎

中村広治郎（昭和四十六年～五十七年任職）は、イスラム宗教史、とくにイスラム史上最大の思想家の一人、神秘主義哲学者ガザリーについて研究した。まずかれの神秘修行の理論を分析したあと、四十八年にはかれの主著の祈禱に関する章の英訳を序説と注をつけて刊行し、ついでガザリー研究の歴史を回顧してかれの回心・引退などの問題点を考察した。さらに五十二年に『イスラム 思想と歴史』を刊行して、イスラムの諸問題を平明に解説した。

大野盛雄

大野盛雄（昭和二十八年～三十五年、三十九年～六十年任職）は、西アジア農村の人文地理学的研究を行い、イランの一農村の二十年間にわたる調査を行い、またイラン、アフガニスタン、トルコの農村について比較文化論の視角から調査研究した。その成果として、四十六年刊行の『ペルシアの農村』、同年刊行の『アフガニスタンの農村から』、四十九年刊行の『フィールドワークの思想』など多数の著書・論文を発表した。

深井晋司

深井晋司（昭和三十一年～六十年任職）は、イラン美術史と東西文化交流史を研究し、イラン、レバノン・エジプトなど西アジアと地中海沿岸地帯にわたって広く現地調査を行い、主としてパルティア期及びササン朝期イランのガラス器、陶器、金属器、および浮彫を研究して、その美術の特質と発展をあとづけ、また、正倉院の瑠璃碗などの日本の伝来の遺物について検討して、ペルシア文化とその古代日本・中国美術への影響について考察した。その研究成果は、四十三年と五十五年刊行の『ペルシア古美術研究』（二巻）、四十八年刊行の『ペルシアのガラス』などの多くの著書・論文に発表された。またそれとともに、イランのターク・イ・ブスターンの浮彫を詳細に調査研究して、四冊の報告書を編集・刊行した。

松谷敏雄

松谷敏雄（四十～四十六年、四十七年以降任職）は、メソポタミア北部を中心とする文明の起源の問題を研究した。長年にわたってイラン・イラク先史遺跡調査に従事して、『テル・サラサート』『ハリメジャン』などの発掘報告書を編集・刊行した。それと同時に、西アジアの特殊な石器の用途を解明するほか、土器の編年などの問題を検討して、農耕・牧畜



鈴木董

という食料生産経済の開始から定住農耕村落の成立・展開に至る過程をあとづけた。

鈴木董（昭和五十八年以降在職）は、オスマン帝国史を専攻し、前近代オスマン帝国の権力構造について支配組織とその担い手としての支配エリートの変遷の分析を通じて研究した。また西アジアにおける国際秩序とアイデンティティの変容の問題についても政治学的分析を加えた。

鎌田繁

鎌田繁（昭和五十九年以降在職）は、イスラム宗教思想、とくに伝統的イスラム神秘主義思想を研究し、イラン・シーア派の神秘主義哲学者モッラー・サドラーの靈魂観及び世界観について考察し、イスラムの伝統的思想家の思索の枠組とその特質の解明に努めている。

西アジア研究の  
助手

助手としては、次の六人が在職した。加賀谷寛（昭和三十一年～三十六年在職）は、イラン・インドを中心として近代イスラム思想の発展を問題とし、この問題との関連で西アジアの民族主義の問題をも研究した。板垣雄三（三十五年～四十一年在職）は、アラブ地域の民族主義の形成と発展について、とくにエジプトに焦点を置いて研究した。黒田和彦（三十九年～四十九年在職）は、ハンムラビ王朝の社会構造の特質の解明に努めた。佐藤次高（四十三年～四十九年在職）は、中世エジプトのイクター制の構造とその下における農村社会の実態について研究した。後藤晃（四十八年～五十四年在職）は、西アジア・アフリカ農業を研究し、イラン土地改革と農業社会の変容、ならびに灌漑農業について調査研究した。加藤博（五十五年～六十年在職）は、十九世紀エジプト経済史を専攻し、ムハンマド・アリー以後の農業と農村社会の変化を研究し、とくに農民の土地所有権の確立過程の特質を明らかにした。

### 東京大学イラク・イラン遺跡調査団

イラク・イラン  
遺跡調査

「東京大学イラク・イラン遺跡調査団」は、イラク政府の招請に応じて、昭和三十一年（一九五六）に江上波夫を団長として組織され、「人類文明の起源とその初期の発展の研究」ならびに「東亜及び日本古代文明の源流としての古代イラン文明の研究」を目的とし、第一期五次に及ぶ調査を行い、その後、「イラン・イラク学術調査」と改組し、深井晋司を代表者として第二期二次にわたる調査を実施した。



第一期調査では、第一次（昭和三十一年九月～三十二年七月）、第二次（昭和三十四年一月～七月）、第三次（昭和三十五年四月～十月）、第四次（昭和三十九年二月～八月）、第五次（昭和四十年六月～四十一年三月）にわたり調査団が派遣された。第一次調査では、イラク北部のテル・サラサートの原始村落址の発掘が開始され、その後第四次、第五次調査、及び第二期第一次調査と四次にわたって発掘が行われ、農耕文化の発生から文明の起源に至る過程の解明に多くの新知見をもたらした。また第一次調査では、西アジア各地の遺跡の一般的調査も実施され、イラン西南部のマルヴ・ダシュトの原始村落址の発掘も行われた。第二次調査に際しては、イラクの政変のため、テル・サラサートの発掘を継続できなかったため、ほぼ年代的に並行するマルヴ・ダシュトの三遺跡で原始村落址の本格的発掘が行われた。また、タル・イ・ムシュキ遺跡の発掘を開始し、発掘は第四次及び第五次調査においても継続され、同遺跡がイランで最も古い段階の原始村落であることが確認された。第二次調査では、ペルセポリスの宮殿やファハリアンのアケメネス期の遺跡の美術史・建築史的調査も行われ、また一部の団員は、東西文化交渉史の解明にとって重要とみられるアルボルス山中のデーラマンの古墳群を踏査した。第三次調査では、デーラマン近郊の古墳群の発掘が始められ、青銅器時代末期から鉄器時代初期にかけての王朝形成期における権力者の実態を示す諸遺跡や、バルティア期の東西文化交渉史研究上重要な遺物を発見した。第四次調査では、テル・サラサート、タル・イ・ムシュキ及びデーラマン古墳群の発掘作業が続けられた。第五次調査では、同じくテル・サラサートとタル・イ・ムシュキの発掘を続けるとともに、イランのササン朝の有名な遺跡であるターク・イ・ブスターンの摩崖彫刻の本格的な学術調査に着手した。

昭和四十二年（一九六七）に江上波夫が停年退官したが、深井晋司が責任者となって第一期調査の報告書の刊行が続けられ、昭和五十年に全一五巻に及ぶ報告書が完成した。第一期調査の報告書は次のとおりである。



『テル・サラサート』(Ⅰ～Ⅲ)、『マルヴ・ダシュト』(Ⅰ～Ⅲ)、『デーラマン』(Ⅰ～Ⅴ)、『ファハリアン』、『西アジアの人類学的研究』(Ⅰ～Ⅱ)、『ターク・イ・ブスターン』(Ⅰ～Ⅱ)。

第一期調査参加者

第一期の調査団参加者は、所内から江上波夫、深井晋司、佐藤達夫、甘粕健、松谷敏雄、古山学、千代延惠正、所外から新規矩男、高井冬二、小堀巖、池田次郎、曾野寿彦、増田精一、石井昭、杉村棟、三宅俊成、杉山二郎であった。

第二期調査

第一期調査の報告書の完成後、調査団は「イラン・イラク学術調査」と改組され、深井晋司を代表者として第二期調査を開始し、第一次(昭和五十一年五月～五十二年三月)及び第二次(昭和五十三年六月～十一月)の調査を行った。第一次調査では、テル・サラサートの発掘とターク・イ・ブスターンの調査を続けるとともに、イラン北部のハリメジャンの青銅器時代末期から鉄器時代初期及びパルティア期の古墳群の発掘に着手した。第二次調査ではハリメジャンでの発掘とターク・イ・ブスターンの調査を続け、調査・発掘にもとづく東西文化交渉史研究を進めた。その後、イラン革命とイラン・イラク紛争により調査を続行できなかったため、二次にわたる調査の報告書の作成に努め、その成果は『テル・サラサートⅣ』、『ターク・イ・ブスターン』(Ⅲ～Ⅴ)、『ハリメジャン』(Ⅰ～Ⅱ)の全五巻の大型本として刊行された。

第二期調査参加者

第二期調査には、所内から深井、松谷、古山、千代延が、所外からは杉山二郎、田辺勝美、渡辺貞幸、堀暎、佐々木達夫、毛利俊雄、木全敬蔵、道明三保子、関口正之、新田栄治、鷹野光行、鈴木隆雄が参加した。

調査の成果

江上波夫により開始され深井晋司に受け継がれたイラク・イラン遺跡調査は、本研究所における西アジア研究の牽引力の一つとなるとともに、農耕文化の発生から人類文明の起源に至る過程の解明及び東西文化交渉史の研究において注目すべき成果を挙げ、広く国際的に学界の高い評価を得たのであった。



## あとがき

本編の編集に当たり、東洋文化研究所百年史編集委員会が昭和五十年（一九七五）に設置された（委員長山崎利男、委員深井晋司・池田温・山田三郎・蜂屋邦夫）。その後、委員は若干の交替があり、一時、佐伯有一も加わったが、五十九年以降は山田・蜂屋・原洋之介・濱下武志・柳沢悠・鈴木薫となった。委員長は六十年年度まで山崎であったが、六十一年度からは山崎が所長になって委員を辞したため、山田が務めることになった。本委員会の設置に先立ち、四十五年、東洋文化研究所三十年史委員会（委員長川野重任）が設置され、関係資料の収集・整理や退官教授等関係者からのヒヤリング等が行われたが、大学紛争のため、三十年史の刊行は実現しなかった。今回の編集においては、その際に作成された各種の資料や、山本達郎名誉教授から貸与された資料のほか、教授会議事録、『東洋文化研究所要覧』（昭和二十七年の第一号から六十一年の第九号まで）、『同概要』（四十一年から四十四年までの四冊）等を用いた。本来、百年史の対象年次は五十二年までとされているが、本研究所の場合、大部門制へ移行した五十六年以降最近までの活動も重要であるので、六十一年三月まで含めることにした。

第一章の「通史」は、山崎・山田・柳沢を中心として執筆し、第二章「研究の進展と成果」は各研究部門関連の委員が執筆したが、正確を期すべく、委員以外の研究所教官にも多数協力を仰いだ。最終稿に当たっては、特に尾上兼英・田仲一成・松丸道雄・松谷敏雄から多大の助言を受けたが、文責は編集委員会が負うものである。

本研究所の歴史に関して、多くの退官教授から貴重な御教示を頂いたことに対し深く感謝する。

昭和六十二年三月

東洋文化研究所百年史編集委員会



東京大学百年史 部局史 四 抜刷

昭和六十二年三月 発行

編集 東京大学百年史編集委員会

発行 東京大学

製作 財団法人 東京大学出版会



